

研究課題は「経済思想史上の英中関係」とし、主に19世紀末から20世紀前半にかけて、中国近代化の過程、特に近代社会科学の導入において、英国の経済思想がどのように中国に影響を与えたのかを、英国、特にスコットランドの視点から研究することを目標に定めた。そこで2019年4月からエディンバラ大学人文学部で訪問研究者として在外研究を行うことになった。

在外研究の1年目は、これまで日本と中国の近現代の経済思想史を研究の中心としてきたことから、まずは思想史を含むスコットランド史、日本と中国を含む東アジアとスコットランドとの関係史の先行研究を学び、現地の東アジア研究者との交流を通じて、現地における東アジア研究の現状を知ることを目指した。受け入れ研究機関となったエディンバラ大学人文学部では、月2回のペースで東アジアに関する研究会が開かれていたので、これになるべく毎回出席した。研究テーマは、豊臣秀吉の朝鮮侵略、日本の小学生の登下校の安全、中国の現代芸術、第二次世界大戦中の日本の従軍慰安婦問題、中国のウイグル政策など、非常に多岐にわたった。

1年目には、ニューラナークとカーコルディに出張して、見学と史料調査を行った。2019年9月に訪問したニューラナークは、ロバート・オウエンが水力を利用した羊毛工場を中心に、住宅、保育施設、学校などを併設したコミュニティを建設し、生活、生産、教育・福祉などが一体となる一種の社会主義の実験を行った場所である。河上肇もマルクス主義者となる以前に、このコミュニティの実践に肯定的関心をもっていた。すでに世界遺産に指定され当時の工場が博物館となっているものの、2019年時点でなお当時の住宅に人が住み続けており、オウエンの理念もある部分で受け継がれていることが看守された。ニューラナークの実地見聞を通じてその歴史に対する理解を深め、関連する資料を収集した。2020年2月にはカーコルディに出張した。カーコルディはアダム・スミスの生まれ故郷であり、関連資料がカーコルディ図書館で収蔵されている。明治以来、日本の経済学者の関心も高く、カーコルディ図書館には日本から寄贈された研究書も多い。カーコルディ図書館の

蔵書を調査すれば、日本を含む各国のスミスへの関心のあり方を知る手がかりがつかめると考え、特に中国の経済学者や思想家のスミスに関する関心を示す資料がないか探そうとした。結果として、中国との関わりでは資料を見出せなかった。一方、日本から寄贈して行方不明になっていたとされる資料を見出し、河上肇の『資本主義経済学の史的発展』で言及されていたスミスの遺品のほとんどがこの図書館でなお保存されていたことを確認できた。

中国とスコットランドの関わりについては、19世紀から20世紀の初めにかけて、2次史料を用いてグラスゴー大学などに在籍していた中国人留学生の調査に着手した。2020年3月にビザ再取得のため一時帰国した際には、東京の東洋文庫で英国に留学した中国人に関わる中国側資料を収集した。清末から民国初期の中国人留学生が、英国特にスコットランドのどの大学に留学していたかなどについて、一定の資料を収集できた。これらをスコットランド現地の記録類と対照検討する研究を2年目に開始する予定であった。

2019年秋に、在外研究期間の1年延長が認められたため、2020年度の受入交渉を行う必要があった。英国の規定により同一研究機関での2年連続の訪問研究が認められないため、2年目はエディンバラ大学歴史学部を受入を要請し、2020年2月の段階で受入の内諾を得た。しかし、2020年3月からCovid-19のパンデミックが英国にも浸透し、エディンバラ大学は閉鎖状態となり国際交流も停止された。ビザ再取得のため2020年3月下旬に一時帰国したが、英国政府も3月21日にビザ発給を停止したため、日本での待機を余儀なくされた。6月下旬に英国政府はビザ発給を再開したものの、エディンバラ大学はなおも国際交流を停止中で、受入は早くても秋以降になるとの見込みを伝えられた。そこで、受入再開を見込んで英国ビザを取得し9月にエディンバラへ再渡航した。ところが、再渡航まもない9月下旬頃からパンデミック第2波がスコットランドにも広がり、11月にはエディンバラ市が都市ロックダウンになった。エディンバラ大学から訪問研究受入は結局なされず、大学だけでなく市内の図書館や公文書にも入れない状況で在外研究を続けざるを得なくなった。

そこで、研究テーマを切り替え、スコットランドと東アジアの関係史の黎明期にある岩倉遣米欧使節団のエディンバラ訪問について研究することとした。これは、インターネットで公開されている史料を利用し、徒歩で行けるエディンバラ市内の野外調査を行って研究を進めることが出来た。この成果は論文にまとめ、現在投稿中である。

在外研究の本来の研究課題であった「経済思想史上の英中関係」については、折を見て研究を再開したい。